世界紀行文学全集

5

イタリア

世界紀行文学全集

5

イタリア

監修＝志賀直哉◉佐藤春夫◉川端康成◉小林秀雄◉井上靖

ほるぷ出版

世界紀行文学全集　第五巻
イタリア

監修――志賀直哉・佐藤春夫・川端康成・小林秀雄・井上靖
発行日――昭和五四年九月一日　発行
発行所――株式会社ほるぷ出版
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五四-七〇三一（代）
代表　中森蒔人
総発売元――株式会社ほるぷ
東京都新宿区新宿二-十九-十三　電話（〇三）三五六-六二一一（代）
製作――東京連合印刷株式会社

NDC 915.6

目

次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

岩村　透　アッシシの七日……三
有島武郎　旅する心……八
上田　敏　フィレンツェより……四五　ナポリより……四七
姉崎嘲風　湖上の春……四六　廻廊の町ボロニヤ……五六　花の里　画の都……六一
新村　出　嶺南思出草……七九
有島生馬　ピザの少女……八二
高村光太郎　伊太利亜遍歴……八九
寺田寅彦　ナポリとポムペイ……九二　ゲノアからミラノ……九四　先生への通信……九五
三宅克己　伊太利旅行の序幕―ゼノアとピサ……九六　羅馬の滞在……九八
与謝野寛　ミラノ……一〇二　ヴェネチヤ……一〇三　フィレンチェ……一〇五
小杉放庵　イタリヤの旅……一〇七
浜田青陵　南伊太利の旅……一〇九
徳富蘆花　汽船カールスバッド……一二二　ブリンディジからナポリ……一二五
愛子　ナポリ……一二七　ローマ……一四一　フィレンチェ……一五三　ミラノ……一五六　コモ湖畔……一五六
田中耕太郎　イタリア紀行……一六七
河東碧梧桐　異国風流……二二六
成瀬無極　伊太利小景……二四四
矢代幸雄　アッシシの鐘声……二五七　太陽を慕う者……二五九　フィレンツェの生活のうち……二六〇

柳田國男　伊太利だより……二六六
阿部次郎　羅馬日記の一節……二六七　アレッツォの一夜……二六八　四月のフィレンツェ……二七〇
石井柏亭　南欧短信……二七六　アスシジの春……二七九
正宗得三郎　伊太利の旅……二八二
斎藤茂吉　羅馬……二九一　蝶々夫人……二九一　ヴェネチア雑記……二九二　ナポリ遊行記……二九七　ポンペイ……三〇二　ヴェスヴィオ山……三〇三　帰途……三〇五
小宮豊隆　イタリーにて……三〇七
板垣鷹穂　小寺小品……三〇八　テーベレとパラティノ……三一三　ペストゥムとアマルフィ……三一六
安倍能成　即興詩人とローマ……三一九　羅馬散景……三二五　シチリヤの旅……三三〇　シエナ漫歩……三三七　斜塔の都……三四六　ボルゴ・サンセポルクロ……三四九　アレッツォ散策……三五一　パドヴァ瞥見記……三五七　マントヴァの一日……三六一
牧野英一　マルコの広場……三六七　ボローニャの古い大学……三七〇
茅野蕭々　ピザの日曜……三七二　カタコムベン行……三七三
土岐善麿　死都一日……三七七　南欧点景……三七八
和辻哲郎　イタリア古寺巡礼……三八〇

岡本一平　画と文

噴火口 四七　泥棒用心 五二　ミラン 五七　伊太利の田舎家 七〇　ナポリ 九二　パン屋のあと 九四　ベニス――ゴンドラ 一〇四　リアルト橋 一〇五　小便無用 一三六　ざんげ箱 一四二　噴水の都――七つの丘 一四五　大理石彫刻の土産 一四九
サン・マルコ寺院 一八六　シーザーの殺された所 二二二　基督の足趾 二三六　伊太利の蟹 二四八　ベニスの横町 二九二
レモン売と不良少年 二九九　ベスビオ 三〇四　古墳と坊主と乞食と蝿 三七四

執筆者・出典一覧……四三

地　図　イタリア、ローマ、ナポリの近郊……巻末（折込）

地図作製　玉木　進一

イタリア編 I

アッシシの七日

岩村　透

一

羅馬からフロレンスへ行く道は、我々貧乏書生の旅行者にとっては、実に不都合に出来て居る。此間の道中に就ては、如何なる無欲者も一考する処であるが、見物序に何もかもと云う、欲張旅行者にとっては、余程苦心をする処である。

と云うのは羅馬からフロレンスへ行く鉄道はオルテと云う駅で二つに分れて、西の線はオルヴィエト。モンテプルチアノ。シエナと云う順に進んでエムポリと云う駅でフロレンス。ピサ線に連絡して居り、東線はオルテからテルニ。スポレト。フォリニオ。アッシシ。ペルジア。コルトナ。アレッツオを経て、直接にフロレンスに達する事となって居る。

処で路銀に限の無い者は兎に角、羅馬の逗留に財布の底浅く見えて、無暗と手帳に数字を並べ始める様になっては、遺憾ながら、東西孰れかの名所見物を棄てなければならぬ。処が生憎に此両線に沿う名所古跡は、殆ど優り劣りのない場所柄であるから、実に判断に閉口する。

西にペルジアの旧都あれば、東にはシエナの名所がある。一方にモンテプルチアノ。オルヴィエトがあれば、一方にはアッシシ。コルトナ。アレッツオがある。オッジ。バリオニ両家争闘の跡をペルジアに尋ね、ニコラ及びジョヴァンニ、ピサノの水盤を賞で、パラッツオ、プブリコの画廊にペルジノ。ピンチュリッキオの作をも見たし、然りとてサン、カテリナの遺跡、市庁の古画、ズッチオの傑作と、且は間がよくば、親しく目撃をも出来得べき、音に名高きシエナ美人を見残すも残念。オルヴィエト本寺の壁画と其彫刻を研究し、モンテ、オリヴィエトに中古僧院の生活を考え。パオロ、ウチエロの跡も尋ねたくもあれば、又たアッシシの古寺を見物し、聖フランシスの行処に詣で、ジオットの傑作、ロレンゼッチの名画をも見たし。これを採らんか、あれにせんか、考えれば考うる程愈〻迷う。貧乏旅行者の為に斯くも意地悪き行路が又と他にあろうか。

二

種々の理由から東線をとる事とし、先ずアッシシに参詣と決定して羅馬の停車場を出発したのが、千八百九十二年七月十三日の事であった。夕六時頃停車場を発してから終夜急行、未だ夜の明けぬ中にオルテで、転車した。オルテからの汽車の客車の粗末な事は甚だしい。下等室の穢たなさは到底日本の下等室の様なものではない。木製の腰掛は小学校用のものと異らず。長旅の腰の痛さは何とも云えぬ、欧州旅行中、未だ斯の如き粗末な客車に乗った事はなかった。

オルテで転車してから、旅の疲労にとろとろと眠入ったが、アッシシ、アッシシと云う車掌の呼声に眼を醒し、車窓から覗いて見れば、未だ夜は明けきらず、小屋同様の田舎停車場には、宿屋から迎の馬車も来て居らん。あたりはシーンとして、唯だ機関車の蒸気の音ばかり、淋しげに聞えて居る。とても茲で下車は出来ず、先ずペルジア見物と、俄かに順序を変更して、其儘其処を出発し、ペルジアに着いたは夜明けの頃。宿屋の馬車に送られて、アルベルゴ、エ、リストラトーレ、デレ、ベレ、アルチと云う、長たらしき名前の宿屋に誘われ、茲に一休の後、ペルジア見物をした。ペルジアの記事は、此紀行の本題でない処から、茲には云わぬ。

三

ペルジアを午後の汽車で出発して、アッシシの停車場に着いたのは、三時頃でもあったろうか。宿屋の乗合馬車に乗ってそろそろとアッシシの丘を登った。アッシシの地形はウムブリア地方の、他の市と一向に異った処がない。矢張同様に摺鉢を倒まにした様な山の中途から、アッシシの市が、柘榴の粒の様に家を構えて居る。市の取巻く山の背にはモント、スバシオと云う山が頭を擡て居る。左には山又山重なり合うて遠くアペナイン連山に続き、右手もアッシ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

シの山続きに遙かにフォリニオ。スポレトの市迄も亘って居る。

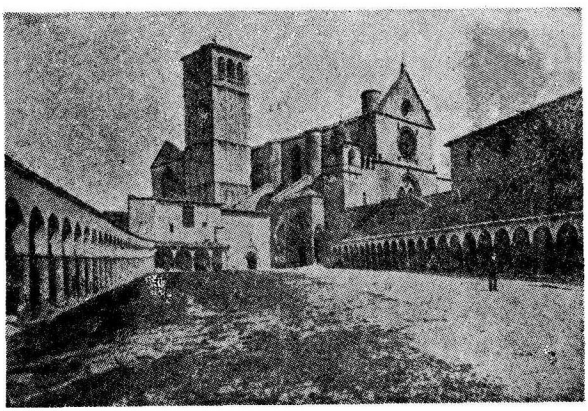
アッシシの山の巓には些細なる城壁を繞らした、中古の城跡があり、右にはサンタ、キアラ寺の鐘塔高く聳え、左には見事に築き上げたサン、フランシスコ寺と其角塔が突立て居る。

市の裾のあたりから、停車場の辺迄は、ダラダラに降って、爰は一面の畠で、所々にオリーヴの林があり、屈曲った幹の上に、柳の様な銀色の葉を着けて居る。大体の処、其位置と云い、市の構えと云い、地中海海辺の市に似て居るが、此近辺の土質が妙に赤く、砥の粉色を帯びて居るのと、アッシシの建築が悉く此近傍に産出する赤間硯に似た石材で築いてある為に、タンジェー。アマルフイなぞの、白く光あるに反して、濃厚に暖かい。

馬は初めはオリーヴの畠路を勢よく走ったが、新道の近辺から歩調乱れて、徐々と坂を登り、サン、フランシスコの寺堂を見上つつ、ポルタ、サン、フランシスコの門を入り、左に折れて旅舎アルベルゴ、デル、スパシオに着き、楼上最南の一室を占めた。

四

アッシシには、美術愛好者と宗教家の巡礼地として、二つの呼物がある、即ち其一が、中世宗教界の豪傑、聖フランシスの遺骸を葬るサン、フランシスコ寺と、他の一が画傑ジオットの手に成る其寺堂内の壁画である。聖フランシスは一千百八十二年に此市に生れ、一千二百八年にフランシスカン宗派を興し、一千二百二十六年に此市に眠った。其遺骸を葬るサン、フランシスコ寺は、上下二層に分って建立せられ、下寺は一千二百二十八年の起工に係り、上寺は一千二百五十三年に落成した。



サン・フランシスコ寺の外部

ジオットがアッシシに来た年月は確かに知れて居らぬが、上寺堂窓下の壁面を飾る二十八個の壁画は、一千二百九十五年頃の製作で、下寺の壁画は一千三百十四年頃の製作と云う事である。其年代に就てはヴァサリ。リンゼイ。ヴオエルマンなぞ区々で一定しない。斯く年代は甚だ漠として確でないが、兎に角ジオットの製作としては、パドヴァのアレナ礼拝堂壁画に次での傑作とせられて居るので、ゴシック時代絵画の研究者にとっては、非常に興味ある歴史的製作である。

五

アッシシ到着の後は先ずサン、フランシスコ寺見物と出かけた。寺は宿屋の殆ど隣と云っても宜い程に近い。宿屋を出て、ダラダラ登りの坂を左へ上ると、一寸とした広場があり、此広場の両側には、煉瓦造の回廊がある。爰がサン、フランシスコ寺祭礼の時に、僧侶の行列をする所で、幸に祭礼の時にでも逢えば、華々しい光景を見らるる事であるが、平日は唯だ小砂利混りの赤土の広場で、一向に興味なく、草さえ処々に生え延びて、あちらこちらに、蜥蜴の走る生白き光が幾分か活気を添える計りである。此広場を過ると、其突き当りが下寺の入口で、別に門と云うべきものもなく、これを入るといきなりサン、フランシスコ寺の西端に出る。

伊太利亜の所謂ゴシック風の寺院に入った心地は、仏蘭西あたりの寺に入った時の心持と、大に違った所がある。仏蘭西、白耳義なぞでは、寺に入っても、左程外部と目立って暗いと云う感は起らぬが、伊太利亜では、外部の陽光が強いので、窓の鬱ない、壁計りかと思わるる寺に入っては、俄に、獄屋にでも入れられた様な心地がして、暫時眼の驚きの醒めぬ間は、寺

内の装飾も見えず、壁面を飾る鮮画にも気付かず、あちらこちらに蟠る、祈禱に余念ない老婆の体も、風呂敷包かと間違えられ、あたり真暗の中に、眩き計りに射さす、五彩の硝子窓の光に、唯だあきれかえるのみである。暫時にして燭台、十字架なぞ磨き上げた金具にあたる、光の点線は、彼処此処と目に付き始め、床を一面に張るモザイックの白き模様に気付き、軈ては天井の鮮画、講壇の彫刻、壁一面に蔽う壁画、嵌石の人物、次第次第と眼に入って、黒きは紫と変じ赤と化し、今迄の獄屋は須臾にして極楽浄土となる。

伊太利亜の寺院装飾法なぞを、唯だ模様本なぞに就て見ると、如何にも派手で、耐らなく思われ、斯くも華麗なる彩色を施したる室内には、瞬時も居耐られたものでなかろうと云う感が起るが、併し之は、寺の明光採りの様子を知らぬからの事であって、出来得る丈窓を鬱くして、光線を防ぐ仕組になって居る、寺院の内部には、派手過ぎる位のもので丁度宜い、若し初から、クスンだ色彩では、唯だ暗黒の塊となって一向に目立つまい。此事はアッシシの寺を見て尚深く感じた。

六

中堂を左へ曲って進むと、正面、横堂と中堂の交叉点に、祭壇を据え、其上には例の如く、丈高き燭台、十字架、それぞれ列べ立ててある。中堂の左右は、幾つとなく区画して、諸聖徒の廟とし、四方の壁天井には、隙間なく鮮画を施してある。壁画の作者は、中世伊太利亜の名家であって、其中にはシモネ、マルチニ。チマブエ。ジオット。ジオッチーノなぞ、当時画界の豪傑の名も見える。祭壇上部、方形の天井は、グロインド、ヴォルトを形成して、此面にも他の部分同様、鮮画を施してある。此鮮画こそアッシシ寺壁画の中、最も有名なものであって、アレナ礼拝堂の壁画と共にジオットの傑作と云われて居る。天井面はヴォルトの骨格の交叉からして、自然と四個の三角面を形成し、此面の中、三面にはフランシスカン派の三大誓約たる、貧乏、廉潔、服従を表する寓意的図題を描き、残りの一面には、聖フランシスのアポセオシスを図題として描いてある。四個の鮮画の中、殊に著名なるものが、貧乏を図題とする鮮画であって。其考の無邪気なる中に、自ずから誠実の現わるる所と、能くジオットの率直なる性格を現わす所から、夙ろく評判されて居る。此画大体の趣向は、聖フランシス、破衣を纏うたる貧乏神と、結婚の式を挙ぐると云う筋であって、耶蘇は媒介人として、新婦新郎の間に立ち、フランシスは新婦の右指に指輪を与えんとして居る。其下には二人の男児を描いて、左方の者は新婦に石を投げんとし、右方の男子は棒を以て、新婦を打たんとして居る。孰れも新婦の下賤なる事を表わさんとする意匠であって、其無邪気の所に何とも云えぬ興味がある。第二の図は廉潔を図題として、これには高塔を描いて其主旨を表し、前方に天使が僧院に洗礼を施しつつある所を描いて、これに潔白と勇気を代表する人物が長旗を授くる所を描き添えてある。第三の服従を表する図は、服従に擬したる人物が、謹慎と謙遜を代表する人物の中間に安座する姿を描き、これに軛を着けられたる僧侶の姿を加えて、服従の意味を明らかにして居る。全画悉く表象的、比喩的絵画であって、ジオットが絵画を用いて。文意的意味を伝えんと智嚢を絞った所歴々として現われて居る。

此寓意画の意匠は、ジオットがダンテの極楽篇、カント第十一、五五節以下の記事から採ったのである、所で此壁画は神喜劇の出てから（一三一四―一三二二年頃）間もなく描かれたものとの説があるが、併しヴォエルマン等の説に拠ると、是等の寓意は、孰れも聖フランシス在世の時に於て、既に行われて居たものであって、ジオットは決してダンテから直接に採ったものでないと云う事である。壁画は他のジオットの鮮画同様、甚だ粗硬の画風を以て描かれ、彩色も香の煙の為めに燻ぼり、線も決して鮮明でない。然れど其古めかしき所は、寺堂全体の古色と能く調和して、一層有難く感じられる。

サン、フランシスコ寺壁画の中、ジオットの比喩画に次で最も著明なるものが、ピエトロ、ロレンゼッチの手に成る、北側横堂の左側にある、聖母及び聖フランシス、聖ジオヴァンニの鮮画である。これはジオットの作の如く、寓意画ではないが、技巧と、人物の相貌から云えば、遙かにジオットの作に優る、殊に表相の一点に於ては中古宗教画の傑作と云うべきものであろう。

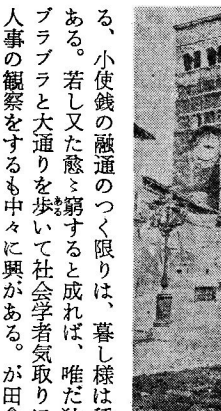
七

下寺を去って再び前の広場へ出て、爰を左へ折れると直ぐに石段がある。これを登ると上寺正面の入口の所へ来る。上寺は下寺の穴蔵風の構造とは大いに異って、明光採りの具合も幾分か良いが、窓は相変らず数尠く、光は朦朧として、寺と云う有難味は何所迄も失せない。唯此寺が殊更に他の寺と違う所は、伊太利亜ゴシック式建築の最古の一と云うにも拘わらず、中堂のみで側廊が無い事である。これが為めに四方はガランとして如何にも淋しい感がせられる。之を仏蘭西あたりの石柱林立するゴシック寺院と比ぶれば、到底ゴシックと云う感はせられぬ。所が此欠点は、四壁を一面に蔽う鮮画の装飾で、充分に塡補して居る。是は流石に有名なる者だけあって、実に見事なものだ。全壁面を四段に分って、腰張の部分に、幾何模様風の幕を描き、其上部列柱の間を竪に三分して之にフランシスの伝記から採った種々の問題を描いて居る。其上方から窓を囲んで二段に区別して、これには聖書中の事実を図題として描いてある。骨格の部分は悉く多様の幾何模様を施し、柱にも多少装飾を施して居る。

上寺の鮮画は、近年になって、頓りに修覆したる為め、古色の面白い所を損して、サンタ、クロチェ寺なぞのジオット鮮画同様、彩色の生生しい所のあるのは、実に気になる。が併し兎に角鮮画である、而かも斯く広い寺院の装飾を、全く鮮画のみに依頼して居る寺院は、又と他にない事であるから（ヴェニス、サン、マルコ寺及びモンリアレ本寺の装飾は広大なれども鮮画ではない、嵌石装飾である）建築家、画家は到底見逃す事の出来ぬものと思う。

八

独身旅で最も閉口するのは、日没頃から寝床に這入る迄の時間の潰し様である。これも羅馬とかフロレンスなぞなれば、如何様にも工夫が付く。カッフェもあれば寄席もあり、芝居もある、小使銭の融通のつく限りは、暮し様は種々ある。若し又た愈々窮すると成れば、唯だ独りブラブラと大通りを歩いて社会学者気取りに、人事の観察をするも中々に興がある。が田舎ときては閉口する。カッフェはなし、芝居は無論、寄席もない。止むを得ず新聞閲覧室に読書でもする事であるが、これも永くは興味の続くものでない。それに性来話好きの余輩如きものにとっては、到底永く話をせずには居られん、話の



サン・ルフィノ寺

餓死をして仕舞う。処で夕方からは、相客であれ宿屋の番頭であれ、給仕人であれ、誰でもよい、向うで相手になって呉れる者さえあれば、とっ捉まえて話をする。それに就ては今だに種種と愉快な記憶を残して居る。羅馬の下宿屋では、毎晩西班牙人と四方山の話に時間を消した。ポムペイの宿屋の檐先にザワザワと夕風に音する傘松の下で、ヴェスヴィアス山の背に懸かる新月を眺めながら、宿屋の亭主から、カサミッチオラ大地震の奇談を聞いた事もあった。プロチダの小島からイスキアの島へ渡る海上、遙かに夕陽に照り輝くナポリの市の美しさを賞めながら、櫂操る船頭と語り合った事もあった。アルプス山上の宿屋に、サムプロン峰に懸る紫色の氷海を見つつ、幽かに、草喰う牛のガランガランの鈴音を聞きながら、百姓と語り合った事もあった。皆な其当時には一時の出来事、些細な事として一向に意にも留めなかったが、後から想えば、旅行としての真の味は、斯る些細の事に残って居るのが多い。

アッシシでは晩食後は必らず近辺に散歩した。都会の大通り、人混の中を肩磨れあって散歩するのも一興であるが、真の散歩の味は、何処でも同じこと、閑静な田舎であろう。殊に伊太利亜トスカナ地方の田舎路散歩ときては、実に理想である。

ポルタ、モヤノの市門を出て小逕へ入れば、一人立の一筋路のみ蹈み固めた土を露わして、草は裳を掃わん計りである。傾斜の急な此路を徐ろ徐ろと下って行けば、足重たそうに登って

来る農婦、脊に負う薪は遙に小逕の外に出て居る。ヤレ気の毒と思って、傍へそれ、左足を葡萄畠に蹈み入れ、左手にて、あり合うオリーヴの枝を握り、身をそり反して待構えれば、先方の歩は思うたよりは遲い。軈て声低くブオナ、パッセジアタと挨拶して行き過ぎる。

ブオナ、パッセジアターブオナ、セーラ、仏蘭西の田舎逕でよく出逢う挨拶ボン、ソワー、亜米利加農夫のグード、イヴニングは、如何にも活潑で勇ましい処があるが、伊太利亜農婦の挨拶は、調子低く如何にも情なく聞える。併し此哀れな処が、よく周囲に調和して、一層伊太利亜の伊太利亜たる趣味を添えるのであろう。伊太利亜の趣味は、凡べて哀れと云う処にあるのであろう。ブルジェもDouce mélancolie Ombrienne と書いて居る。

一夕、アッシシから例の小逕を降りて、ポーチンクラと云うフランシスカン派の有名な寺のある小村へ行った。寺の周囲に繞らす鉄柵にもたれて、あたりの破れ家の様子を窺って居ると、軈て是も散歩と見えてブラリブラリと一人の男がやって来た。僅かの緒から始めて、種々と話し合った。ダンテ、タソ、アリオストなぞ、無図かしい話も出た。暫らくして、男は迎いの者に連れられて帰ったが、後から聞けば、此男は角の鍛冶屋の二階に住む、村の医者様だそうな。

アッシシでは例の如く、毎度宿屋入口の石段に腰打かけ、向いの家の窓に、婦人の裁縫に余念なき影を見ながら、宿屋の番頭と、四方山の話に夕を消した。食堂ではジョスリンと云う瑞典の女画家と、ヴィラ、メジチに当時留学中のアンリ、ユスターシと云う建築学生と懇意になった。此人は去年のサロンに名誉金牌をとった、今は名高い建築家である。

九

実際アッシシに住んで居る人に就て聞くと、アッシシは実に暮しの安価い、楽な処だ。一日二円八十銭で一家三人の家族が、貴族の様な暮しが出来る。それで下婢を雇って、其外に荒仕事をする下男は日々通って来る。此下男の給金が一ヵ月四円、下女の給料が二円八十銭、而かも馬を飼って私用の馬車迄付いて居る。

最も安価のが家賃で、年にタッタ五円とは実に無代見た様なものである。それに物価も万事安価い。鶏卵が一個一銭、豆が一斤四銭と云う相場であるそうだから、総て他が察せられる。

処がアッシシあたりの人の、日々の食事の話を聞いて見ると益々驚く、先ず日々の定食の順序が斯うである。第一、朝の七時頃に珈琲を飲む。八時頃に一寸軽い飯をやる、其菜は大抵塩豚か鶏卵位いのもの。それから十二時に始めて飯らしい、所謂コラチオネをやる。皿数は三四品でソップ、マカロニ、それに何か肉が一皿、外にパンと葡萄酒は無論の事、午後の四時頃に葡萄酒を一盃やる、それが日本のオヤツ、英吉利の「四時の喫茶」と云う処であろう。最後の晩食が夜の八時半で、これには、普通の皿数の外に蒸焼の鶏にサラドなぞ云う贅沢物がつく。これで三人前一日二円八十銭とは、実に安価いものではないか。

十

アッシシの近傍にカルチェリと云う小さい礼拝堂がある。茲は聖フランシスが、荒行をしたと云う処で、アッシシ名所の一に数えられて居る。一朝、未だ路傍の草に露玉の懸る頃、ポルタ、カプチニの門を出で、独り小逕をたどってカルチェリに参詣した。

路はスバシオ山の裾をうねりうねりて次第に山深く這入る、あたりは一面のオリーヴ林で人家は更に無く、聞ゆるものは己が足音と、時々渓より渓へ渡る小鳥の声のみ。道は愈々山深く入って凡そ一時計りの後、ささやかな庵室に着いた。カルチェリの礼拝堂は、実に小さな建物であって、十畳位かとも思われる礼拝堂と、これに伴う至極粗末な僧庵との外には何物もない、通路は殆ど肩をすれ合わす程に狭い。礼拝堂には例の通り二三人の老婆が、椅子に黙坐して祈念をして居った。番僧は唯だ一人と見えて、案内も祈禱も皆な一人でやって居る。軈て此番僧が案内してフランシスの行処を見せて呉れた。室は小さな石室で、岩の床と石枕とがある。

フランシスは屢々アッシシから遁れ出でて、独り此庵室に籠り、岩床に臥し、石に枕して苦行をしたと云う事である。庵を出る時に参詣者名簿に記名し、粗末な銅版画にカルチェリの聖母を印刷した、袋に包んだ虫除けの粉を貰らった。此紀念物は今だに持って居り、度々見ては

十年以前アッシシ参詣の当時を想い出して居る。

十一

七月二十日の午後に宿屋の馬車でアッシシを降り、元の停車場から、名残惜しきアッシシを後に、フロレンスへ向って出発した。アッシシ七日の逗留は、未だに深く記憶に印して、書を読み地図を繙き、アッシシの文字に接する毎に、当時の事を想い出さぬ事はない。運よく縁あらば、又た再び見る事も出来ようか。併し仮令え出来ぬとも恨むべきでない。一度なりとも其土を蹈み、其オリーヴの影に憩うた事は、幸運と云わねばならぬ。人生旅行程愉快なものはない。思う儘になるものならば旅のみに一生を終えたきものを。

（明治二十五年）

旅する心

有島　武郎

○

旅装をととのえるにつけて思うことは心の旅だ。家を離れ、友と別れて人は旅行くように、心も何時かは一度、習慣を離れ、愛着と別れて独り淋しい旅に上らねばならぬ。……死……。旅装をととのえるにつけて思うことは心の旅だ。

○

一九〇五年某月某日

山の如く群がり集まる紐育ホボケン埠頭の見送り人の中に、私は私に対する一人の見送り人も見出さなかった。私は少し淋しい、然し全くこだわることのない秋のような涼しい心で、見送る人々、見送られる人々が船と埠頭との間に描き出す心の渦紋を眺めやっていた。日も秋の初め。空も秋らしく晴れわたった午後であった。

船はプリンツセス・イリーネ。サロンから起る盛んなブラス・バンドの行進曲につれて、幾百かの旅心は徐ろに米国の土から離れて行った。

やがて奏楽はやんだ。船客の笑いも涙も各々の胸の奥へと沈んで行った。私は自分の船房に這入って見た。そこに小卓の上に、船にあてて送られた葉書が二枚乗ってゐた。一枚はアーサーとその妹のフランセスから。一枚は神経衰弱の為めに仮りの宿としていたワシントン郊外の田舎家の人々から。

何という孤独な三年を米国で過していたものだろうと私はその時しみじみと思い入った。

かくばかりの孤独を敢て忍んで来た私を誇りたい心もあった。その反対の心もあった。

私は暫くぼんやりとして、寝台に深く腰をおろしたまま動かずにいた。

○

この朝亜米利加を出てから始めて陸の影を見た。それは葡萄牙に属する小さな五つの島で、その名をファヤル・ピコ、サン・ジョージ・グラチオーザ、テルセイラ、サン・ミグネル、サンタ・マリヤという。所謂アゾーレ群島だ。その美しい名の連なりが、私をして既にラテン民族の領域に近づいたことを思わせる。海抜六千尺といわれるピコの火山の頂きには、雲冠が霊の輪のように置かれていた。面積の最も広いサン・ミグネル島の海沿いには、白壁赤瓦の民家が、牧場に餌をあさる羊の群のようにちらほら立ちならんで、山の斜面に石垣で築いた段畑に

は、雑穀の類と果樹とが綿密に栽培されていた。七日緑を見なかった船客の眼は、どれほどこのなごやかな色を嗜み貪ったろう。

あすこに住んで一生を終る人もあるのだ。私はあの島を暫く眼にとどめた。その島の上にうごめく人の影も不注意には見落さなかった。けれども私は二度とあの島の傍を過らないかも知れない。あの島に住む人と私自身の存在とは、何という遠い隔りだ。普段はただ事もなげに暮らし過してはいるけれども、ふとこんな境地に眼覚めると、生きるということが恐ろしくさえ考えられるではないか。私がこの地上に繋ぐ因縁の微弱さを……而して自然の窮りなき豊満と多様とを……。心がひとりでに叫び出したくなるようななつかしみを感じながら、言葉もかけず、挨拶もかわさず、ただ一眼見合わしたばかりで、永遠に視界から離れ去ってしまう人。その人は一体何の為めに私の前に現われ、何の為めに私から隠れてしまうのだろう。

夕方にはもう島々は見えなかった。夜が暗く来た。欠けて行く月がおそく海から上って、波の上にささやかな燐光を投げた。

○

トラファルガーの湾を遠望して、船はタリファ岬を近々と通った。海に突き出た岩礁の木がくれに、四五百の人口を護っているらしい一かたまりの家屋が見える。それは英語のタリフという語源となったタリファの村だ。バイロンの海賊編の中からでも脱け出て来たような海賊共が、無頼放恣な風俗をして、海上を行く商船を目がけて、隼のように小船を乗りつけて掠奪を擅ままにしたあたりはここだ。赤い布の鉢巻き、寛濶なズボン、段だら染めの帯の間に半月なりに曲った小刀をたばさんで、小船の舷頭に倚る彼等の姿が眼に見えるようだ。

国家はこの海賊共のし残したことを、もっと散文的に而して合法的に模倣して、それが国際の通商には欠くべからざる制度となった。それは戦国時代の偸盗が、偃武時代の大名となったのとよく似ている。けれどもその色彩は何という黝ずみかたをしたものだろう。

私の想像は更に太古に溯って、このあたりの海の上に、勇敢無敵な小船の群を描き出した。フェニシヤを船出して数十日、ブリトンの山に銅を、北海の岸に瑪瑙を探ろうとする冒険比いなき商隊の乗るところのものだ。それらの小船は、地中海の波おだやかな航海を終えて、金毛の裘を求むる希臘神話の船のように、巨利そのものよりも、夢の如き冒険の快味に誘われつつ、この外海の波濤に船を弄ばせているのだ。或は又、大きな独木舟を思わせるような細長い船の舷に、丸い楯をかけならべ、百尺虫のように長い櫂を立てて毛皮と肉とで身づくろいした北方の海賊達が、サガの中の戦歌を海風に歌い合せながら、所在に恐怖を播きつつ乗り廻したのもこの辺だろうか。

欧羅巴に来ると海も亦老いる。

○

忽ち私の空想は破れた。船の舳首に当って、沙漠の砂から頭を擡げた獅子のように、かの世に名だたるジブラルタルの巨岩が見え始めた。それは英国の牙だ——一旦事が起らば、欧羅巴の喉笛を噛みしばるべき英国の牙だ。

その恐ろしい、直径二哩半に亘る獅子頭の下に、三時頃船は繋われた。米国の見物に夏休暇を過して、今は帰途にある西班牙の女学生の群と、伊太利見物に出かける米国の学生の群とは、唯一人なる日本人の私を加えて上陸した。一番の大通りでも幅は極めて狭く、而して曲りくねった坂路ばかりだ。家は中庭を繞って四方に建て連ねた中の虚ろな四角形の建物から成り立っていて、その一方に狭く入口がついている。欧羅巴に来てから、かかる様式が伊太利、仏蘭西あたりの一般のスタイルであることを知った。その様式はポムペイの廃墟のそれとほぼ同一である。壁は灰色のセメント、瓦は大抵は赤、窓の鎧戸は淡緑。道を隔てて家から家に張り渡された華やかな色の日よけの幔幕の下を、群衆が肩を摩さんばかりに混雑して往来している。きらびやかな扇に日を遮って、縫のある草色のショールを頭から、肩から羽織った西班牙の婦人、手に細杖を弄んで、キャップを横被りにした英国兵、黒衣を着て、こごみがちに長い髪を風におののかして行く猶太の神官、けばけばしい寛濶の絨衣を装うて憍悍な面構えをしたモアーの商人、美しい露店の草花と果物、快い蔦色の皮膚に、大きな眼を持つ少年少女、荷をしこたま背に積んだ騾馬、鞭の音、声高な罵り、油

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com